
河野裕一の事件簿

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

河野裕一の事件簿

【Nコード】

N5960A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

高校生探偵と呼ばれる主人公がとある事件に首をつっこむ。その後……。

プロローグ

俺の名は、河野 裕一。

君たちに会うのはこれが初めてかもしれない。

職業は高校生だ。

世間では高校生探偵と呼ばれている・・・。

今日は、俺が解決した事件の事をお話しよう・・・。

渡月橋殺人事件！（事件編）（前書き）

事件編です。

今回は、京都の嵐山が舞台です。

渡月橋殺人事件！（事件編）

ここは、京都の嵐山にあるとある旅館。

ここに、ある高校の団体が宿泊している……。

その中に、一人注目を浴びているのが……。

そう、主人公の河野 裕一である。

彼は、成績優秀、運動力抜群で、男女共同にモテる世界で優秀でN
o.1の名探偵である。

武：「裕一、何読んでんだ？」

武・・・彼は、裕一の友人である。

フルネームは秋山 武。

裕一：「ん、推理小説を読んでるんだ。」

武：「お前、そんなの読んでんのか？」

そう、彼の好きな小説は推理小説だ。

彼は、いつも推理小説しか読まない。

本人曰く、「俺は探偵になりたいから」だそうだ。

裕一：「何だよ、それじゃ俺が読んじゃいけないみたいな言い方だな。」

どうしたらそう取れるのか不思議だ……。

そこへ、女子が男子の部屋へ入ってきた。

ジュン：「あの、すいません？」

ジュン・・・彼女は、裕一のクラスの女子生徒だ。

裕一とは小学校の頃から一緒の学校だったらしい。

毅：「木之本さん、男子に何か用？」

毅・・・彼は、裕一のクラスの学級委員である。

苗字は小山。

ちなみに、「木之本」というのは「ジュン」の苗字である。

ジュン：「いや、用があるのは裕一君の方なんですけど、裕一君はい

る？」

毅：「いるよ、今呼ぶから待ってて。」

すると、毅は裕一を呼びに行った。

裕一：「ん、ジュンが来てる？」

分かった・・・。」

そう言っていると、裕一は出入り口に向かった。

裕一：「よっ、何か用か？」

ジュン：「うん、ちよつと来てくれる？」

裕一：「ああ、良いけど・・・。」

そう言っていると、ジュンは裕一を旅館の外まで連れて行った。

辺りは暗く、闇夜に月が一つ浮かんでいる・・・。

裕一：「おいおい、こんな所に連れて来て・・・。

一体、何のまねだ？」

ジュン：「暇だったから散歩でもしと思ったんだけど・・・。

一人じゃ心細かったから・・・。」

裕一：「だったら、女友達でも誘えば良いだろ。」

ジュン：「それでも良かったんだけど、今日は裕一君と一緒にいた

かったから・・・。」

裕一：「何だよそれ。」

暫くすると、渡月橋が見えて来た。

ジュン：「あ、橋だ！」

裕一：「あれは、渡月橋とげつきょうって言つて、この嵐山おおいがわの大堰川に架けられ

ているんだ。

この橋は、嵐橋とも呼ばれ、古くは平安時代の始めの承和3年・・・。

西暦836年に空海の弟子、道昌が大堰川を修築したおりに架橋されたものだと言われているんだ。」

ジュン：「へえ」

裕一：「渡月橋は、亀山上皇が曇りのない夜空に月がさながら橋を渡るようなさまをみて『くまなき月の渡るに似る』と、感想をもら

した事から、『渡月橋』と呼ばれる様になったんだ。」

ジュン：「裕一君、詳しいんだね。」

あれ、あそこに誰か倒れてるよ？」

と、ジュンが言った。

裕一は「言ってみよう」と言い、倒れている人の所へ様子を見に行
った。

だが、それは、ただ倒れているのでは無かった。

裕一：「し、死んでる！」

ジュン：「警察に電話した方が良いんじゃない？」

裕一：「そうだな・・・。」

と、裕一は携帯を取り出し、110番に電話をする。

110番：『はい、110番です。』

事件ですか、事故ですか？』

裕一：「事件・・・人が死んでるんです。」

場所は、嵐山の大堰川に架けられている渡月橋の上です。」

そう言い、電話を切った。

ジュン：「ねえ、もしかして・・・。」

裕一：「どうした？」

ジュン：「私たち、重要参考人として扱われるから、今日は旅館に
戻れないんじゃない・・・。」

その可能性は高いな。

よし、クラスの奴に電話をしておこう。

裕一：「じゃあ俺、学級委員の毅に電話するわ。」

その後は・・・。」

ジュン：「由来ちゃんにも電話をして。」

由来・・・フルネームは野沢 由来。

彼女は、同じクラスの学級委員である。

裕一：「ああ、そうだな・・・。」

てかさあ、二人に電話するくらいなら担任に電話した方が早くねえ
？」

最初からそうしろよ！

ジュン：「それもそうね・・・じゃあ、そうしましょう。」

裕一は、電話帳から担任の番号を見つけ、そこへ掛けた。すると、担任が電話に出た。

裕一は今の状況を手短に話した。

担任は、了承をして電話を切った。

それにしても、警察はなかなかやって来ない。

一体何をしているのだろうか？

ジュン：「遅いね・・・。」

もしかして、私たちの事を信用してくれて無いのかなあ・・・。」

裕一：「もしそうなら、手は一つしか無い・・・。」

ジュン：「どうするの？」

と聞いてくるジュンに対して裕一は・・・。

裕一：「親父に電話をするのさ。」

ジュン：「そっか、裕一君のお父さんって、警視庁捜査一課の警部だもんね。」

裕一の父は、河野 祐二と言い、警視庁捜査一課の警部である。

彼は、警察に対して顔が広いから何とかなるであろう・・・。

裕一は、電話帳から父親の携帯の番号を見つけ、電話を掛ける。

祐二警部：「（ん、裕一からか・・・。）
どうした？

・・・。

何、嵐山の大堰川に架かってる渡月橋で男性の遺体を発見した？

それで、地元の警察に電話はしたのか？

・・・。

え、警察が来ない！？

解った、こっちから連絡を入れておく。」

祐二警部は電話を切った。

警察が来るまでにやっておかなければならない事は・・・。

裕一は、警察が捜査で使う様な白い手袋をはめ、男性の遺体を調べ始めた。

ジュン：「ちよつと、何やってんの？」

そんなに遺体を弄くり回したら、死後硬直が崩れて死亡推定時刻が分かんなくなつちやうよ？」

裕一：「大丈夫だよ。」

（硬直の具合からして、死後1時間半か・・・。）

ジュン、今何時だ？」

ジュンは、腕時計を見て言った。

ジュン：「PM・9：00だよ。」

裕一：「と言う事は、死亡推定時刻はPM・7：30か・・・。

死因は、首絞めによる窒息死。」

裕一は、他に何か無いか調べた。

すると、遺体の内ポケットから、免許証が出て来た。

名前は深山^{みやま}光^{ひかる}、歳は38歳。

免許証によると、住所は京都府京都市と言う事になっている・・・。

数分後、パトカーのサイレンが聞こえ、警察がやって来た。

郡山警部：「京都府警捜査一課の郡山^{「おじやま」}次郎^{じろう}だ。」

本庁から電話があつて来たんだが、本当に事件だったのか・・・。
何をのんきな事を・・・。

郡山警部：「君たちが第一発見者？」

裕一：「はい、そうです。」

僕は河野 裕一、探偵です。」

郡山警部：「あ、そう。」

で、遺体には触っていないだろうな？

と言つても、その様子じゃ触っているだろうな・・・。」

ご名答！

裕一は100%触っています。

郡山警部：「こりゃあ、司法解剖に回さないと、死亡推定時刻は解らんな・・・。」

いや、死亡推定時刻はもう解っている。

裕一は、郡山にその事を話した？

郡山警部：「それは本当かね？」

裕一：「嘘なんかついてどうするんですか？

あ、そうだ・・・、これを。」

裕一は郡山に免許証を渡した。

郡山警部：「これは・・・被害者の身分証明書か。」

そこへ・・・。

有希子：「郡山警部へ。」

と、一人の可愛い女性が走って来た・・・。

郡山警部：「おお、河野君。

今日は随分遅いお着きで・・・。」

有希子：「すみません・・・あれ？

もしかして、そこにいるのは裕一？」

郡山警部：「お知り合いかね？」

有希子：「何言ってるんですか？

この子は私の息子ですわ。」

今は訳あつて別居中ですけどね。」

息子・・・。

って事は、この女性は裕一の母親？

裕一：「か、母さん？」

有希子：「うわゝ、覚えててくれたんだあ。

母さん嬉しい。」

そこで、郡山が咳払いをした。

その咳払いで我に返った裕一の母・有希子は、裕一に事件の事を聞いて来た。

裕一は母に全てを話した。

有希子：「すつごおい！」

流石、私の息子だわ！」
さすが

と、裕一に抱きつく。

裕一：「か、母さん……く、苦しい……。」

有希子：「あ、御免ね。」

母さん、懐かしくてつい思いっきり抱きしめちゃった。」

そこで、郡山が二度目の咳払いをする。

有希子：「あ、すみません……。」

それじゃあ裕一、真面目にやりましょうか。」

真面目にやってなかったのかよ!?

とまあ、そんなこんなで、ようやく捜査を開始し始めた……。

取調べ

PM・9:30、京都府京都市右京区（きょうとふ きょうとし
うきょうく）、嵐山の大堰川（おおいがわ）・・・。

渡月橋には、事件の為に警察が集まっていた。

有希子：「警部、被害者の交友関係を洗ったところ、この三人の方が被害者に会っていたと言う事なので連れて来ました。」

郡山警部：「ご苦労だった。」

では、まずそちらの方からお名前を教えて貰おう。」

郡山は、一人の女性を指名した。

女性の名は高山 香織。

彼女は、被害者の深山とは、高校時代の友人で久々に会っていたと言う。

理由は、恋愛についての相談だったらしい・・・。

死亡推定時刻のPM・7:30には、一人で自宅にいたと言う。

しかし、それを証明する人物は誰一人としていなかったが、自宅で深山からの電話を受けたと言う。

因みに、深山の推理小説を1時間ほど聞かされていた。

自宅から事件現場まで車で20分。

続いて、郡山は二人目を指名した。

二人目は男性。

男性は深山 徳（のり）。

被害者の深山とは、大学時代の友人で、帰宅途中に偶然会い、立ち話をしたと言う。

事件当時は、一人で自宅にいたと言う。

しかし、それを証明する人物は誰一人としていなかったが、自宅から高山に長時間の電話を掛けたと言う。

自宅から事件現場までは車で10分。

最後の一人は女性。

女性は、高島 優^{ゆう}。

高島は被害者の深山と同じ会社で働くOLである。彼女は、深山の事を運命の人だと思っている。

要するに、深山が好きって事だ。

事件当時は、自宅に一人でいたと言う。

因みに、アリバイの証明になるかは微妙だが、事件当時は自宅でテレビを見ていた。

番組名は、名作、推理劇場。

これで、一通りの取り調べは終了した。

その後、警察の調べで、高島が事件当時に見ていた番組は、その時間に放送されていた事が解った。

勿論、内容も一緒だった・・・。

「でも、ビデオに録画をしておけば被害者を殺害してからでも見れるんじゃないの？」

と、裕一がツツコミを入れたが、推理劇場は

「衛星放送なのでビデオに録画する事が出来ない」

と、郡山に言われてしまった。

「それもそうか。」

と、裕一。

と言う事は、彼女はシロと言う事になる。

次に、疑問が残るのは電話をしていたと言う二人。

推理小説を聞いていただけのなら、その間に抜け出して犯行を行うことも可能だ。

また、逆に話しているだけなら、録音したテープを流し、その間に抜け出して犯行を行う事も可能だ。

だが、それでは欠点がある。

話している間に聞いている人が質問をしてきたりしたら一発でバレるし、逆に聞いている側に話を掛けてきてもバレる。

いずれにせよ、今の段階では犯人は解らない。

要するに、もう少し捜査が必要って事だ。

沖田健三の不自然な自殺（前書き）

此処で、本文に入る前に前回までの事件を整理しておこう……。まず、最初の被害者が深山 光。

そして、事件の内容が、「大堰川殺人事件」と言う小説と酷似している事と、被害者が死に際に残したメッセージが「渡月橋殺人事件」と言う事……。

以上の三点から、捜査が始まったと言う訳だ。

では、此処から「沖田健三の不自然な自殺」に入ります。

沖田健三の不自然な自殺

P M・10:30、事情聴取が終わり、重要参考人を帰宅させ、次の段階へ取り掛かった。

裕一：「解けるかな・・・この事件。」

ジュン：「何言ってるの？」

裕一君は、世界で優秀でN O・1なんだから、解けない謎なんて無いわよ。」

裕一：「そうだ、俺はN O・1だ。」

俺に不可能なんて文字は無い。」

ジュン：「うん、その意気よ！」

とは言ったものの、裕一に事件を解く自信など無かった。

有希子：「警部、これなんでしょう？」

郡山警部：「どうしたんだね？」

有希子は、何かを見つけた。

それを郡山が確認した。

郡山警部：「これは一体・・・。」

と、血で書かれた文字の様な物を見て言った。

裕一：「ダイイングメッセージ・・・。」

郡山警部：「ダイイングメッセージ？」

有希子：「犯人が他人に無実の罪を着せようと残した物の事ですよ。」

「

裕一：「バール、それを言うなら、被害者が死に際に残した犯人の正体を教えるメッセージだろうが。」

この母親、大丈夫か？

で、肝心なメッセージとは・・・。

有希子：「渡月橋殺人事件」

と、メッセージを読み上げた。

裕一：「そういえば、この事件によく似た話を読んだ事がある・・・

。

昔読んだ小説の大堰川殺人事件……。

確か、あれも此処で男の人が死んでいたと言う内容だったな。

もしかして、この事件って……。

有希子：「ああ！

そう言えばその推理小説の被害者って、此処で殺された被害者と同じ名前じゃなかった！？」

裕一：「もしそうだとしたら、犯人はそれを模倣している事になる……。」

ジュン：「本当に模倣してるんじゃないの？」

裕一：「だとすると、もう一人殺される……。」

名前は、沖田 健三……。

母さん、沖田健三の住所を調べて彼を保護して！

早くしないと手遅れになる！」

有希子：「解ったわ。」

そこで、郡山の携帯が鳴る。

郡山は電話に出る。

郡山が電話を終えると、「もう手遅れだ」と言った。

何が手遅れなのかは聞くまでも無かった。

そう、沖田 健三が小説の通りに殺されたのだ……。

裕一：「手遅れだったか……。」

兎に角、現場へ行こう。

郡山警部、現場へ案内して下さい。」

裕一は、郡山に現場を案内する様頼むと、パトカーに乗るようにと言われた。

現場は、京都市内の一軒家だった。

裕一達は、現場に足を踏み入れた。

「此処が現場か……。」と、裕一が呟いていた。

現場は、事件当時のままだった。

勿論、遺体も未だに片されていない……。

裕一は、最初に遺体を調べ始めた。

遺体は、首を吊っていた・・・。

暫くすると、遺体を調べていた裕一が、真つ青な顔をした・・・。

郡山警部：「顔色悪いぞ、どうしたんだね？」

裕一：「郡山警部・・・。

そ、その・・・あの、今度の事件・・・。

大堰川殺人事件と言う推理小説と被害者の死に方が完全に同じなんです。」

郡山警部：「じゃあ、沖田 健三は、小説通りに殺されたと言うのかね？」

裕一：「その通りです。」

それに、沖田さんの内ポケットに入っていたこの遺書。

書いてある事が小説と一緒になんです・・・。」

郡山警部：「ちよつと見せてくれ。」

そう言つて、郡山は遺書を受け取ると、それを読んだ・・・。

遺書にはこう書いてあった。

- - - - -

私、^{わたくし}沖田 健三は、大堰川の渡月橋で深山 光と言う男性を殺害しました。

動機は、4年前に正式に発売された推理小説です。

実は、あの小説は私が考えた作品なんです。

その作品を、ある男性が盗み、出版社に自分の物だと偽つて提出してしまつたのです。

私は、それが誰なのか突き止めました。

そして、本日、その人に会いに行きました。

私は、その人に小説の事を、身分を隠しながら訪ねました。すると、彼はベラベラ喋り、全てを告白しました。

その時でした、私の心の奥底に眠っていた殺意が飛び起き、私は被害者を殺害しました。

被害者の名は、深山 光です。

私は、深山さんに酷い思いをさせてしまいました。
全ての罪を償う為、死んでお詫び致します。

沖田 健三

遺書は小説の通りに此処で終わっていた……。

大堰川殺人事件と言う小説では、沖田が真犯人で、それを苦にした
自殺だった……。

郡山警部：「成る程……事件はこれで終わりか……。」
これが本当に模倣ならそう言う事になるであろう……。
しかし、そうは行かなかった。

何故なら、現場の状況が小説と微妙に違っていたからだ。
それは、小説では沖田が自殺する時に使った踏み台があったのに、
この現場にはその踏み台が無かったからだ。

つまり、沖田の死は自殺に見せかけられた殺人だったのだ。

裕一は、郡山にその事を話した。

郡山は少し驚いていた……。

裕一は、ダイニングメッセージの「渡月橋殺人事件」と言うのを思
い出していた……。

理由は、「渡月橋殺人事件」と言うのが事件を解決する為のヒント
になっているからだ……。

須佐之男の正体（前書き）

いよいよ事件も終わりに近づいて来ました。
最後までお読み下さい。

須佐之男の正体

裕一達は、大堰川殺人事件の小説の作者を捜していた。

裕一：「先^まずは、小説の出版社である宮本出版へ行きましょう。そうすれば、作者の名前が解ると思います。」

郡山警部：「で、その出版社は何処にあるんだね？」

裕一：「東京です。」

郡山警部：「と、東京！？」

我々京都府警は管轄外だぞ！？」

裕一：「あ、それならご心配なく。」

先ほど、電話で本庁に頼んで京都府警が東京で捜査をするって事で許可を貰いました。」

郡山警部：「君は一体、何者？」

裕一：「警視庁捜査一課に勤める、河野 裕二警部の息子です。」

郡山警部：「何！？」

君がああ警察の中で最も変人な人で有名な河野 裕二の息子！？」

裕一：「親父を馬鹿にしないで下さい。」

ああ見えても、推理力は抜群なんですよ？」

郡山警部：「ああ、すまん、すまん。」

裕一は、ジューンを旅館に帰り、郡山と京都駅に来ていた。

二人は、東京行きの新幹線の切符を買い、新幹線に乗った。

郡山警部：「お、そろそろ東京だな。」

と、郡山が言う・・・。

東京に着いた裕一達は、小説の出版社である宮本出版を目指した。

宮本出版は、東京駅から徒歩10分の所にある。

出版社に着いた彼らは、受付で出版担当の方を呼ぶようお願いした。暫くすると、出版担当の方が現れた。

浩：「初めまして。」

出版担当の川間^{かわま} 浩^{ひろし}と申します。

出版のご相談ですか？」

郡山は、警察手帳見せながら「京都府警の郡山です」と、言った。

浩：「あ、警察の方ですか・・・」

警察の方が私に何かご用ですか？」

と、言う浩に対して、郡山は事の事情を公開可能な範囲で説明した。

浩：「そうですか・・・」

そう言う事でしたら、お教え致しましょう。

実は、あの小説の作者は不明なんですよ。

要するに、一方通行って訳ですね。

毎年、6月になると、差出人不明の小包が届き、その中に執筆された原稿用紙が多い時には5000枚程入っているんです。」

そう言うと、浩は立ち上がって「今朝方届いた原稿用紙を持って来ますね」と付け加え、倉庫へ入って行った。

時間にして2分くらいだろうか・・・

倉庫から浩が大きな袋を抱えながら出て来た。

浩：「これがその原稿用紙です。」

見ると、原稿用紙は何百枚も重ねられていた・・・

郡山警部：「ほお、これはかなりの量ですなあ。」

浩：「今朝、届いた時に数えたら、5500枚入ってました。」

5500枚も入っていたのか・・・

やれやれ、数えるのも大変だ・・・

「ご苦勞様です」と言っただけだ。

郡山警部：「因みに、これはどんな内容なんですか？」

浩：「まだ読んでいないんですが、原稿用紙に付属されていた手紙には、ストーリーの簡単な説明が書かれていました。」

これがその手紙です。」

と、浩は手紙を取り出した。

手紙にはこう書かれていた。

- - - - -

出版担当の川間 浩 様。

こんにちは、須佐之男すさのおです。

これを読んでいると言う事は、既に原稿用紙が貴方の下に届いていると言う事ですね。

今年の作品は、日本神話に出てくる八岐大蛇やまたのおろちを利用した推理小説です。

今回の作品をお読みになられ、採用される事を願って応募致しました。

是非、私の作品をお読みになり、採用して頂きたいと思います。宜しくお願い致します。

- - - - -

郡山警部：「この、須佐之男と言うのは？」

浩：「最初に送られて来た『大堰川殺人事件』と言う小説に付属していた手紙によると、須佐之男と言うのは、素戔嗚尊すさのおのみことの事だそうです。

恐らく、ハンドルネームでしょう。」

郡山警部：「素戔嗚尊と言うのは？」

裕一：「素戔嗚尊は、日本神話に出てくる1柱の神。

日本書紀では、伊弉諾尊いざなぎのみこと、伊弉冉尊いざなみのみことの二人の間に産まれたと記されている。

また、三貴神の末子に当たる。

しかしながら、その与えられた役割は、太陽を神格化しんかくかした天照大神あまてらすおおみかみ、月を神格化つぎよみのみことした月夜見尊とは少々異なっている。

伊弉諾尊は、天照大神に高天原を、月夜見尊に夜を、素戔嗚尊に、海原を治めるように言った。

古記事によると、須佐之男はそれを断り、母神である伊弉冉尊のいる根の国に行くと言い始め、伊弉諾尊は怒り近江の多賀に引きこもってしまった。

須佐之男は根の国へ向う前に姉の天照大神に挨拶をしようと高天原へ行った。

天照大神は須佐之男が高天原に攻め入って来たのではと考えて武装

して須佐之男に應對し、須佐之男は疑いを解くために誓約を行う。
誓約によって潔白であることが証明されたとして須佐之男は高天原に滞在するが、そこで粗暴な行為をしたので、天照大神は天の岩屋に隠れてしまった。

そのため、須佐之男は高天原を追放されて葦原中国へ降った。

葦原中国の出雲へ降った須佐之男は・・・・大国主の神話において根の国の須佐之男の元にやってきたオオナムチ（大国主）は、須佐之男の娘であるスセリビメに一目惚れするが、須佐之男はオオナムチに様々な試練を与える。

オオナムチはそれを克服し、須佐之男はオオナムチがスセリビメを妻とすることを認め、オオナムチに大国主という名を贈った。

と言つのが、素戔鳴尊の話です。」

と、裕一は終わるまで語り続けた。

だが、語り終えた頃には二人とも上の空だった・・・。

よほど話が長かったのだろうかと思つた・・・。

裕一：「警部、京都へ戻りましょう。

ちよつと気になる事があるんです。」

郡山警部：「それじゃ、戻ろう・・・。

川間さん、私たちはこれで・・・。

お忙しい中、大変ご迷惑をおかけして申し訳無い・・・。」

浩：「いえいえ、良いんですよ。

おかげで歴史の勉強も出来たことですし・・・。

あ、そうだ。

東京の土産にこれを持って行つて下さい。」

浩は、郡山に「つまらない物だ」と言いながら、東京のお菓子「ひとつづ桃」を手渡した。

郡山は、「頂きます」と言つと、裕一と一緒に出版社を後にした・・・。

彼らは、東京駅に向かい、京都府に戻つた。

京都府に戻つた彼らが真つ先に向かつたのは、高山 香織の自宅だ。

インターフォンを押すと、高山　香織が顔を出した。

香織：「あ、刑事さん・・・。」

裕一：「一つお聞きしますが、事件当時は遠山　徳^{のほろ}さんの推理小説を1時間程聞かされていたと証言しましたよね。

そのときに、聞かされていた小説の内容を教えてくださいませんか？」

高山は、「日本神話に出てくる八岐大蛇を利用した推理小説です」と答えた。

それを聞いた裕一と郡山は顔を合わせる・・・。

裕一：「それ、本当ですか!？」

香織：「ええ、本当です。」

これで、須佐之男の正体が解った。

後は直接本人に会うだけだ。

裕一と郡山は、須佐之男こと遠山　徳がいる自宅へと向かった・・・。

須佐之男との面会（前書き）

須佐之男すけのおの正体が判明。
犯人は須佐之男か？

須佐之男との面会

裕一と郡山は、須佐之男こと遠山 徳のほに会う為に車で移動していた。
。。。

郡山警部：「この分だと、もうすぐ事件は解決しそうだな。。。」「
裕一：「そうですね。。。」

暫くすると、遠山が住むおんぼろのアパートが見えて来た。（大家さん、御免なさい。。。）

郡山は車を止め、二人は車から降りた。

車から降りた二人は、遠山のいる部屋まで行き、インターフォンを押した。。。。

すると、中から遠山が顔を出した。

徳：「僕に何か？」

裕一：「須佐之男とは、貴方の事ですね？」

すると、徳はふたりを突き飛ばし、逃げたそうとした。
だが、裕一はそれを抑えた。

郡山警部：「さて、署まで来て貰おうか。。。」「

郡山と裕一は徳を連れて京都府警まで行った。。。。

P M . 3 : 1 5、京都府警捜査一課第1取調室。

郡山警部：「遠山さん、何故逃げようとしたんですか？」

徳は口を割らない。。。。

口を割らない徳に対して、郡山は取調室の机を思い切りひっくり返して徳を脅した。

裕一：「け、警部・・・落ちついて。。。」「

郡山は「ハッ」と、我に返り、ひっくり返した机を元の状態に戻した。

そして、こう言った。

郡山警部：「逃げたのは、貴方が須佐之男だからですか？」

そして、徳は遂に口を割った。

徳：「はい、そうです・・・。」

郡山警部：「何のために？」

徳：「それは・・・。」

徳は再び黙ってしまった。

そこへ、今度は裕一が揺さぶりを掛けた。

裕一：「貴方が深山 光殺害の容疑者だからですね？」

郡山警部：「か、河野君！？」

それに対して、徳は反論した。

徳：「お、俺はやつてねえ！」

裕一：「大堰川殺人事件・・・。」

この小説を書いたのは貴方ですね？」

徳：「ああ、それは4年前に俺が最初に書いた推理小説だ。

その小説と今回の事件に何か関係があるのか？」

この人、何も知らないのか？」

裕一：「同じなんですよ・・・。」

徳：「何が同じなんですか？」

裕一：「今回の事件の被害者の名前と死に方がその小説の内容とね。」

徳：「死に方が一緒なんですか！？」

裕一：「ええ、最初の被害者は深山 光さん、次が沖田 健三・・・。」

深山さんは、ナイフで心臓を一付き。

沖田さんは首吊り・・・。

また、沖田さんの内ポケットに遺書が入っていました。

遺書の内容は、その小説に書かれている遺書と同じでした。

何故、小説内の人物が実在の人物なんですか？」

それに対して、「それは、彼らが小説に本名で出してくれと頼み込

んで来たからだ」と、徳は言った。

郡山警部：「本名で出してくれ？」

本当にそう言ったのか？」

徳：「はい……。」

裕一：「それで、貴方はその小説に彼らを本名で出したと言う訳です
ね？」

徳：「その通りです……。」

裕一：「そうですか……。」

では、もう一つ。」

徳：「はい、何でしょうか？」

裕一：「貴方は4年前、深山さんに小説のネタを盗られた事があります
か？」

徳：「ん、一回あったかな。」

あれは、盗られたと言うより、『上げた』と言った方が良いのかな。」

裕一：「ネタを深山さんに上げた？」

徳：「いいえ、私は沖田さんに上げました。」

沖田に上げた……。」

と言う事は……。」

裕一：「そのネタは、沖田さんに上げた後、どうなりました？」

徳：「沖田さんは、深山にネタを盗られたと言っていましたね。」

裕一：「その後はどうなりましたか？」

徳：「沖田さんが言うには、宮本出版に出されてしまったそうです
よ。」

宮本出版に投稿……。」

動機としてはバツチりだ……。」

裕一：「因みに、その事を他に知っている方は？」

徳：「それなら、香織が知ってるよ。」

僕達の間では、隠し事は無しにしてるんです。

勿論、仕事の事も全部話してますよ。」

成る程……。」

と言う事は、高山さんにも殺害する動機があると言う事か……。」

しかし、沖田さんを殺害する理由が解らない・・・。

犯人は、何の目的で沖田さんを殺害したんだ？

裕一にはそれが疑問でしろうがなかった。

裕一：「所で、沖田さんは、最近誰かに恨みを買われる様な事はありましたか？」

徳：「沖田さん？」

さあ・・・解りませんね・・・。

あ、もしかすると、6年前の・・・。」

裕一：「6年前？」

6年前に何があつたんですか？」

徳：「すいません、詳しい事は言えないのですが、沖田さんは6年前に一度、東京で交通事故を起こしてるんです。」

6年前に交通事故・・・。

裕一：「それで、どうなつたんですか？」

徳：「それ以上は言えません・・・。

詳しい事が知りたいなら、東京の警察に聞いてみてはどうでしょうか？」

黙秘か・・・。

裕一は渋々携帯を取り出し、裕二の電話番号を見つけ、そこへ掛けた・・・。

呼び出しが数回鳴り、裕二が電話に出る。

裕二：『ああ、裕一か・・・どうした？』

裕一は、6年前に沖田さんが東京で起こした事故の事について訪ねた。

すると、裕二は面白い事を教えてくれた・・・。

6年前の交通事故

裕二は、6年前に東京で起きた事故を話してくれた。

その内容はこうだ……。

6年前、裕二がまだ交番勤務の時に、亀有公園前派出所の目と鼻の先で起こった交通事故だった。

被害者は、高山 総一郎と言う弁護士……。

当時の事故により、被害者の高山 総一郎は他界……帰らぬ人となった。

当時、事故車両を運転していたのが、今回の首吊りで亡くなった沖田 健三。

そして、その助手席に乗っていたのが深山 光……。

更に、警察では、その事故の事は上から圧力が掛かり、もみ消しなり、永久に葬り去られたと言う事だ。

圧力を掛けたのは他でもない警察庁の長官である沖田 健三の父、
沖田 恒彦^{つねひこ}だ……。

彼は、息子・健三とその友人の深山に頭を下げられ、やむを得なく下に圧力を掛けたと言うのだ。

裕一は、その事を取調室で話した……。

全く、酷い話だ……。

郡山警部：「成る程……。

だが、そうなると振り出しに戻ってしまうぞ？」

そこが問題なんだ……。

あの、「渡月橋殺人事件」と、書かれたダイニングメッセージの謎も解けていないし……。

そこへ、「コンコンコン」と、扉を叩く音が聞こえた。

郡山警部：「どうぞ。」

と、郡山。

「ガチャ」と、取調室の扉が開かれた。

有希子：「警部、深山さんの遺体を司法解剖した結果、少量のアルコールが検出されました。」

事件当日は飲んでいた可能性があります……。」「
アルコールの検出？

事件当日に犯人と酒でもやっていたのか？

裕一は暫く考え込んでいた……。」「

徳：「あのく、そろそろ帰らせて貰えませんか？」

郡山警部：「ああ、構いませんよ。」

河野君、帰して良いよね？」

裕一：「ん、何か言いました？」

郡山警部：「遠山さんが帰らせてくれと……。」「

裕一：「ああ、構いませんよ。」

これまでの捜査で、遠山さんはシロだと言うことが分かりましたから……。」「

ん、帰る？

それは、少し待って貰おう……。」「

裕一：「遠山さん、帰る前に一つ伺っても宜しいでしょうか？」

徳：「何ですか、刑事さん？」

裕一：「4年前に沖田さんに上げたと言う小説は、大堰川殺人事件じゃないですか？」

徳：「そうですね、それが何か？」

やはりな！

裕一：「その小説、深山さんが宮本出版に投稿したと聞きましたが、須佐之男と言うハンドルで出したという可能性は？」

徳：「さあ……。そこまでは……。」「
成る程……。」「

どうやら、事件の真相が少しずつ見えてきた様だな。

裕一の推理（前書き）

此処では、裕一が推理した事をまとめてあります。
皆様もこれを頼りに推理してみてください。

裕一の推理

裕一はこれまでの事件を頭の中で整理をしていた。

先ず、最初の被害者は深山 光。

事件当時、彼は高山 香織と会っていた。

香織の証言では、恋愛についての相談だったらしい。

恐らく、恋愛と言うのは高山 優^{ゆう}の事だろう……。

次に、高山 優のアリバイ。

彼女は、犯行時刻には自宅で衛星放送を見ていた。

勿論、それは証明されている……。

この事から、優はシロと言う事が証明された。

そして、高山 香織と遠山 徳のアリバイ。

二人は同時刻、電話をしていたと言う。

遠山は、一方的に推理小説のネタを香織に話していた……。

また、香織は一方的に遠山の小説の内容を聞かされていたと証言している。

次に、深山 光殺害の動機。

これは、怨恨で間違い無いだろう……。

そして、沖田 健三殺害の動機。

これも怨恨。

また、この二人は6年前に事故を起こし、一人の人間を殺している。その人の名は……そう、弁護士の高山 総一郎だ……。

この事から考えると、犯人は一人に絞られ、同時に遠山 徳はシロになる……。

だが、此处で一つの疑問が浮かぶ。

本当にあの人が犯人なのかと……。

もし、あの人が犯人なら、「渡月橋殺人事件」というダイニングメッセージの意味は何だ？

恐らく、大堰川殺人事件という小説に何か関係しているのかもしれ

ない・・・。

きつとそうに違い無い。

そう思った裕一は、渡月橋に事件の関係者を全員呼び出した・・・。
そんな事より、何か大切な事を忘れている様な気がしてしょうがない・・・。

だが、今は真相の解明が大事だ！

事件の真相（前書き）

此処で、犯人が明らかになります。

まだ、犯人が解っていない人は見ない方が良くかもです・・・。

事件の真相

有希子：「裕一、事件の真相が分かったって本当なの？」

裕一：「ああ、本当さ。」

郡山警部：「で、犯人は誰なんだね？」

裕一：「そう急かさない・・・。」

先ず、先に話しておかないといけないことがあります。」

香織：「先に話しておかないといけない・・・事ですか？」

徳：「それって、何なんです？」

もったいぶらないで教えて下さい。」

裕一：「遠山さん、これから話す事は貴方にとってはとても辛い事だと思います。」

それでも構いませんか？」

徳：「構わない、俺だって事件の真相を知りたいからな。」

それぐらいの覚悟は出来ている。」

遠山は覚悟を決めた。

それを確認した裕一は、事件の真相を話し始めた。

裕一：「先ず、第一の事件についてお話ししましょう。」

確か、最初に殺されたのは深山 光さんでしたね。」

郡山警部：「そのとおりだ・・・。」

裕一：「そして、次に殺されたのが、沖田 健三さん。」

徳：「え、沖田さんって、殺されたんですか？」

でも、貴方は府警でこう言いましたよね。」

『今回事件が大堰川殺人事件と同じ』だって・・・。」

裕一：「言いましたよ・・・。」

だが、最後の沖田さんの所だけ、小説と微妙に違ったのです。

遠山さん、小説で沖田さんが殺人を苦に自殺したときの現場の状況を話してみして下さい。」

徳：「沖田さんは、部屋で首を吊って死んでいました。」

現場には、自殺するのに使った踏み台がありました。」

裕一：「その通りです。」

しかし、実際の事件では何かが足りなかったのです。

それは、何でした、郡山警部？」

郡山警部：「確か・・・踏み台だったかな？」

裕一：「そう、実際の部屋には自殺に使った踏み台が無かったので。」

これこそが、殺人を裏付ける決定的な証拠になったのです！」

香織：「で、犯人は？」

裕一：「まだまだ、最後まで聞いて下さい。」

更に、我々が捜査を続けると、面白いことが解りました。

沖田さんは6年前に東京で交通事故を起こしています。

その時の被害者は、弁護士の高山 総一郎・・・。

現場は亀有公園前派出所・・・。

当時の事故により、高山弁護士は他界・・・帰らぬ人となった。

これが、沖田さん殺害の動機です。」

香織：「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

徳：「やはりそうか・・・。

それじゃあ、深山君もそれが原因なんですか？」

裕一：「いや、深山さんは少なくとも違います。

もしそうなら、『渡月橋殺人事件』と言うダイニングメッセージの意味が解らなくなってしまうです。」

徳：「そうか・・・。

じゃあ、そのメッセージの意味は？」

裕一：「それは、これから真犯人に説明して貰いましょうか・・・。
お願いします、真犯人の高山 香織さん！」

その名前に、皆が驚く。

香織：「ちょ、ちょっと待って下さい。」

私が殺したと言う証拠があるんですか？

それに、深山君が殺された時間、私は徳から電話を貰ってたんです

よ？

自宅で電話を受けている私が、どうやって深山君を殺害するんですか？

説明して下さい。」

裕一はしばし考えた後、説明をした。

裕一：「携帯電話で受け取ったんじゃないんですか？」

徳：「ま、待ってくれ。」

俺はあの時、香織の携帯には掛けていない……。

自宅の方に掛けたんだ！

それに、香織の所の電話はコードレスじゃない。

コードレスでも無い電話をどうやって持ち歩くんだった？」

裕一：「言っただでしょ……携帯電話で受け取ったと……。」

香織：「言ってる意味がわかりませんわ。」

裕一：「電話の転送サービスを利用し、自宅に掛かってきた電話を携帯に転送したんじゃないんですか？」

そして、恰も相手に自宅で受け取った様に錯覚させ、アリバイの証人に仕立て上げた……。

そうじゃないんですか！？

なんなら電話の通話記録を調べても良いんですよ？

どうなんですか、高山 香織さん！？」

だが、高山は否定をした……。

香織：「そうね、その方法なら私も出来たかもしれない……。

でも、それなら徳が携帯で家に電話を掛けて、深山君を殺害しながら小説の内容を話していたという事も考えられるわよ？」

確かにそうだ……。

だが、そうだとすると、沖田さんを殺害する動機が無いんだ。

やっぱり、高山 香織が犯人だとしか考えられない。

裕一：「確かに、貴方の言う通り、遠山さんが深山さんを殺害したかもしれない……。

だが、それでは沖田さんを殺害する理由が無いんですよ。

6年前の交通事故・・・。

被害者の高山 総一郎・・・。

彼は、貴方の父親だったんじゃないんですか!？」

その言葉で、高山は驚いた。

そして、遂に口を割った。

香織：「・・・やつぱり・・・最後はバレちゃうのね・・・。

そう、沖田さんを殺害したのは私よ・・・。

動機は貴方の言った通り・・・。」

やはりそうだったか・・・。

裕一：「では、深山さんを殺害した動機は何ですか？」

香織：「待つて！」

沖田さんの殺害は認めるけど、深山君を殺害したのは私じゃないわ
！」

な、何だつて!？」

裕一：「そ、そんな馬鹿な!？」

深山さんは6年前の事故の関係者だ!

なのに、貴方は犯行を否認するんですか!？」

香織：「確かに、深山君も事故車に乗っていたわ。

でも、運転していたのは沖田さんよ?

父を殺害した張本人は沖田さんなのよ?

無関係の人まで殺害する必要は無いじゃない!」

ん、俺は此処に来てとんでもない思い過ごしをしていたのか・・・。

犯人はもう一人いる!

そしてその犯人は!？」

裕一：「そうですね・・・。

貴方が深山さんを殺害して、何の得があるのでしょうか・・・。

深山さんを殺害して得をするのは貴方だ、遠山 徳さん!」

徳：「ば、僕が犯人!？」

一体、何故!？」

何の根拠があつて!？」

全てはあれだ！

裕一：「ダイイングメッセージですよ・・・。」

そう、あの『渡月橋殺人事件』と言う血文字のな！

遠山さん、貴方は推理小説で大堰川殺人事件と言うのを書きましたね。」

徳：「それが何の証拠に？」

裕一：「その小説は沖田さんに譲ったと聞きました。

そして、それを深山さんが盗んだとも聞きました。

しかも、深山さんはそれを宮本出版に送った・・・。」

須佐之男という名前で・・・。」

徳：「だからって、僕が彼を殺した理由にはならないでしょ？」

裕一：「貴方は、深山さんが貴方の小説を宮本出版に出し、それが正式に公開された・・・。」

そして、彼の出した小説はベストセラーになった・・・。」

貴方はそれが許せなかった・・・。」

だから、殺害したんじゃないんですか！？」

徳：「じゃあ、聞く！

『渡月橋殺人事件』とはどういう意味なんだ！？」

裕一：「大堰川殺人事件・・・。」

つまり、貴方のことですよ。

深山さんは死に際にどうしても犯人のことを伝えたくて、とっさにそう書いたのでしょうか・・・。」

もう、言い逃れは出来ませんよ、遠山さん！？」

徳：「あれは、どう説明するんだ？

沖田の内ポケットに入っていたダイイングメッセージさ。

あれを説明しなきゃ、俺が犯人だとは決め付けられないぜ？」

それは、解ってる・・・。」

あてずっぽうを言ってみるか・・・。」

裕一：「あれは、貴方が用意し、沖田さんの内ポケットに入れたんじゃないんですか！？」

徳：「それは何時だ？」

裕一：「高山さんが沖田さんを殺害した後ですよ……。」

ジュン、郡山、有希子と他数人がざわめく……。

徳：「ふつ、全部完璧だと思ったんだがな……。」

最後の最後にボロが出るとは……。」

裕一：「本当の名店は看板さえ出していない。

いくら完璧なつもりでも、必ずどこかしらにミスがある……。

人間は誰一人完璧じゃないんだ……。」

あの時に、ダイイングメッセージの存在に気づいてさえいれば……。

あの時に、踏み台が無いことに気づいてさえいれば……。

あんたは完璧な殺人犯になれたかもしれない……。」

徳：「ふつ、そうだな……。」

やるな、新米刑事、俺の負けだ……。」

裕一：「俺は刑事じゃない……。」

高校生探偵だ！」

徳：「世の中には刑事が足元にも及ばない人物がいるとはな……。」

」

エピソード

その後、高山と遠山の二人は逮捕され、偶然にも同じ刑務所に入る
ことになった。

簡単に言えば同棲つて奴だ……。

そして、裕一は、事件解決に協力した為、京都府警より、感謝状を
貰った。

さらに、もみ消しが原因で事件が起きた為に、警察庁の沖田 恒彦
が逮捕された……。

いや、証拠隠匿の罪で逮捕されたといえはよいのだろう……。

そして、裕一たちは旅行期間の残りを楽しんだ……。

めでたし、めでたし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5960a/>

河野裕一の事件簿

2010年10月9日13時31分発行